

実用音楽研究講義のためのメソッド研究

Research on the Method of Film Scoring

栗山 和樹
KURIYAMA Kazuki

アニメーション、コンピュータゲーム、インターネット、映画など新しいメディアにおける音楽において、専門性をもった音楽大学卒業生に人材を求める企業も少なくない。特に管弦楽を用いた交響楽的作品の作曲または編曲は高度な管弦楽について堆積された知識が必要であり、その知識、技術を有する音楽大学卒業生は囑望されている。その社会的ニーズに対応すべく、実用音楽コースでは実践的に実用音楽を学ぶ「実用音楽研究」講義において、映画音楽背景音楽の作曲技術を身につけるカリキュラムを展開してきたが、さらに交響楽的作品の作編曲に特化した技術を磨くメソッド開発の必要性を強く感じ、新たなメソッド開発研究を模索してきた。そこでハリウッド映画において長年、オーケストレーターをつとめてきた第一人者、ブラッド・デクター氏のスコアを分析研究し、より交響乐的な作品を生み出すためのメソッド開発を研究題材に選んだ。

キーワード：映画音楽、管弦楽法、オーケストレーター、ブラッド・デクター、ハリウッド映画

1. 研究概要

1.1. 研究目的

アニメーション、コンピュータゲーム、映画は我が国独自のポップカルチャーの中心的存在となり、世界から注目され、商業的に大きな成功を収め、今や我が国の主要産業のひとつとなった。外務省をはじめ、政府機関がその経済的効果に注目し、国をあげての支援に乗り出している。隣国、大韓民国では映画産業の産業支援だけでなく、人材育成にも国家的なプロジェクトとして着手し、国営の映画製作者養成教育機関を設立、その機関から巣立った人材が外国語による世界初のアカデミー最優秀作品賞を獲るなど大きな成果をあげている。これら分野において、音楽は重要な役割をもち、日本人特有の文化向上のために高度な音楽制作技術能力の保持者を養成する需要が高まっている。このような社会的ニーズにこたえるべく、一個人の範疇を逸しない程度ではあるが、新しいメディアでの作曲に関するカリキュラムを模索してきた。

これらメディアの先進国であるアメリカで、早くからこの分野の教育に着手してきた私立大学の映画音楽専攻科では、次のような事項を学ぶカリキュラムが施行されている。様々なドラマスタイルに適した作曲をするスタイル学習、オーケストレーション、映像とのシンクロニゼーション、録音、編集、コンピュータによる音楽制作、楽譜制作、映画作品分析、法律、ビジネスマーケティングがカリキュラムの核として置かれている。本学の実用音楽コースでは「実用音楽研究」「DAW 演習」「実用管弦楽法」の3つの講義があり、映画における音楽の配置、ドラマにあわせてどのような音楽を作曲するかを考えるドラマタイズ、コンピュータによるシンセサイズ、MIDI プログラミング、レコーディング、オーケストレーションをカリキュラムの核にすえている。先ほど述べたアメリカの大学や先進的な日本の音楽大学のように学部から大学院まで専攻学科をもち、プロ用スタジオと同程度の本格的な教育施設をもつ教育機関とでは比較にはならないが、カリキュラムの核となる部分では同種類のを備えられるよう尽力してきた。

近年ではコンピュータの普及により、低価格のコンピュータおよび機材により誰でも簡単にアニメーション、

コンピュータゲーム、インターネット、映画など新しいメディアに付随させる音楽を自宅で手軽に完成することができる。そのため音楽大学卒業生の需要は減少したが、それでもなお管弦楽曲の作編曲は堆積された知識が必要であり、それを有する音楽大学卒業生を求める企業は多く、複数の企業より優秀な卒業生の推薦を求める声があり、就職が難しい音楽大学にあって大変ありがたく感じている。そのような社会の需要から、管弦楽作品の作曲に力点をおき、さらに専門性を増した本学独自のメソッド開発に必要性を感じている。小さな編成から管弦楽への編曲ができる技術を学ぶだけでなく、管弦楽にふさわしい楽曲が作曲でき、管弦楽編曲を専門職とする「オーケストラーター」との共同作業により、より交響楽的作品を作曲できる能力を身につけることが必要と考える。そこで、管弦楽にふさわしい楽曲骨格を作曲できる人材を育成するメソッドを開発することを目標として研究をはじめた。邦人作曲家が実用音楽の分野において管弦楽編成を用いた作曲を行う際の問題点を踏まえて、最善のメソッドとは何かを考えるために、ハリウッドで活躍するオーケストラーターの管弦楽用編曲を分析、研究する。一見矛盾しているようだが、オーケストラーターの技術を学ぶことによって作曲を学ぶ。

1.2. 研究内容

映画音楽における邦人作品とハリウッド作品を、ランダムに聞かせ、その作品は邦人作曲家が作編曲したのか、ハリウッド映画界で活躍する作曲家が作ったものであるかを、作曲を専攻する学生、非専攻の学生をとりまぜてブラインドテストを行ったところ、100パーセント間違ふことなく、邦人作品とハリウッド作品を聞き分けることができた。邦人作品とハリウッド作品は歴然とした違いがある。邦人作品はハリウッド作品と比較し、圧倒的に和声感が瘦躯であり、音響的に低圧であり、構造的に浅慮である。和声構造、音楽スタイル、ホモフォニックな管弦楽構造、対位法的な構造に違いが感じられた。この違いを考えるべく、それらに秀でていたハリウッド作品のオーケストレーションを分析研究し、邦人作品との比較分析から着手した。問題点は、単に作曲に関する音楽的問題、編曲に関する問題だけにとどまらず、編成や音楽制作プロセスの違いにも関係するが、複数の視点から音楽面を分析し、これらの要因を考察し、これらを改善するメソッドとは何かを考える。

1.3. 研究方法

「実用音楽研究」講義で楽曲分析の素材として長年、研究してきたジェームズ・ニュートン・ハワード作品から、管弦楽作品として研究価値のあるキュー（映画背景音楽の1曲）を選択し、聴音により管弦楽総譜を制作した。日本を代表するレコーディングスタジオであり、映画音楽、アニメ、ゲーム音楽等の音楽録音でも定評のあるサウンドシティスタジオ（東京都港区麻布台）の協力を得て、第一線で活躍するスタジオミュージシャンたちによるアンサンブルにより、制作した管弦楽総譜の弦楽器群部分のみをAスタジオで録音および整音した。この弦楽器群のみを録音した素材に、後日、本学オーケストラスタジオにて、学部専攻生および大学院専攻生に演奏を依頼し、弦楽器群の録音素材に重ねる方法で管楽器、打楽器群の録音を行った。この録音物をもとにオーケストレーションを担当したデビッド・デクター氏の管弦楽法を分析研究した。管弦楽用編曲に焦点をあてるのではなく、オーケストラーターによる管弦楽用編曲が施されると交響楽的な特性が得られる作品の作曲方法とはどういうものかを見出すことを焦点に分析した。これらは2020年度個人研究費（特別支給）により、演奏家への演奏謝礼、楽器使用料、録音スタジオ料金、録音エンジニア謝礼等、録音にかかる費用を捻出することができた。従来、実用音楽研究および実用管弦楽法の講義では、ピアノによる代替演奏や、コンピュータによるシミュレーションで得られた音源による教材を使用していたが、今回の録音によりできた音源を研究素材としてのみでなく、貴重な教材として講義で使用していく。

1.4. 研究素材

今回、分析の対象とする作品は、アメリカの映画音楽作曲家ジェームズ・ニュートン・ハワードが音楽を担当した1993年公開のアメリカ映画『デーヴ』のキューの中から交響楽的特徴をもつ作品を選曲した。実用音楽研究講義で長年、ドラマタイズする音楽として研究を重ねてきたが、今回はじめてオーケストレーションにフォーカスしてこの作品を分析することにした。

ハリウッドでは予算の限られた小規模の作品やテレビシリーズを除く一般的な映画制作では、映画音楽作曲／編曲を分業で行うことが一般的で、キューの旋律、和音、リズム、ベース、対旋律など主要な骨格を作る作曲家と、その骨格を記したスケッチをもとに管弦楽用に編曲するオーケストレーターに分業によって行われている。オーケストレーションは複数のスタッフが担当することもしばしばある。以後、オーケストレーターによる管弦楽用編曲される元の作品のことを「原作品」と呼び、原作品を作曲する作曲家を「原著作者」と呼ぶ。原著作者は映像内に流れるスタッフロールに「音楽」としてクレジットされ、一般的に映画音楽の作曲家と称される。

この作品は旋法的音階や、モーダル・インターチェンジなどアメリカ近代音楽で多く使用される近代和声を用いられ、1990年代のアメリカ映画として典型的な音楽様式をもつ。ホワイトハウスを中心にアメリカ大統領に関するエピソードをコミカルに描くヒューマンドラマであるため、アメリカ近代音楽の風合いを感じさせる音楽様式を用いている。この作品はハリウッドを代表するオーケストレーター、ブラッド・デクターがオーケストレーションを担当している。

1.4.1. ブラッド・デクターについて

ブラッド・デクター Brad Dechterは1956年11月6日、アメリカ、カリフォルニア州、ハリウッド生まれ。幼少よりビッグバンドのトロンボーン奏者であり音楽教師であった父親のテッド・デクターから音楽を学ぶ。クラリネット、サクソ、フルートを学んだ後、イエール大学にて音楽学士号および修士号を取得する。1981年からハリウッドを拠点にオーケストレーター、作曲家、木管楽器奏者として活躍。マーク・アイシャム、マーク・シャイマン、ジョン・デブニー、マイケル・ジアッチーノ、ジェームズ・ニュートン・ハワード、ジェームズ・ホーナー、トレヴァー・ジョーンズなどの作曲家のオーケストレーションを担当した。『The Fugitive』、『The Prince of Tides』、『My Best Friend's Wedding』、『The Village』、『The Passion of the Christ』、『Defiance』、『Michael Clayton』でアカデミー賞にノミネートされた。『The First Wives Club』のほか『Mary Poppins Returns』、『Rogue One』、『42』、『City Slickers』、『The Dark Knight』、『Dolphin Tale』、『The Sixth Sense』を手がける。

純音楽作品としてピアノとオーボエのためのジャズ協奏曲を作曲している。サクソ奏者として、ジョージ・コールマンに師事し、エラ・フィッツジェラルド、チャーリー・ベンチュラ、ビル・ホルマン、ビル・ベリー、秋吉敏子、レイ・アンソニーと共演。南カリフォルニアのジャズ界の著名人をフィーチャーしたグループ Brad Dechter Octet のリーダーである。

デクターの管弦楽用編曲は非常にオーソドックスなスタイルで、充実した響きが特徴的で、金管が主体のダイナミクスが広い管弦楽法が豊かな表現力を持ち、普遍的なスタイルは研究素材にふさわしいと考え、採択した。

2. ブラッド・デクター管弦楽用編曲の分析

この分析は、邦人作品に比べハリウッド作品のもつ交響乐的な響きの豊かさと、「いかに交響楽的特徴をもつ原作品を作曲するか」という作曲技法教授のためのメソッドを開発することが主目的である。ここに焦点をおいて、ハリウッドでもっとも活躍するオーケストレーターのひとりであるブラッド・デクターの管弦楽用編曲を分析する。分析は「音響的特徴」「構造的特徴」という2つの視点により分析を行った。最初に「音響的特徴」に

ついで考える。

2.1. 音響的特徴

デクターによる管弦楽用編曲はハリウッド作品の特徴でもある圧倒的な重厚感と管弦楽すべての楽器が共鳴している和声感が特徴的である。高音域から低音域にいくに従って大きなエネルギーをもつ構造は、形状から「ピラミッド構造」と呼ぶ。低音域の基音が倍音を発生し、上部吹奏される楽器群と共鳴し大きな響きを生む。この構造と相反する形として、低音から高音にむけて音の強度が強くなる逆三角形の構造は、高音域一帯に広がる光彩輝く音色であり、ここでは「ピラミッド構造」に対して「汎高域構造」と名付ける。古典的な管弦楽法にはなく近代管弦楽法の特徴のひとつといえる。この2種類の音響現象がハリウッド作品の特徴を顕著にあらわすものとする。

2.1.1. ピラミッド型構造

和声構造の発達した西洋音楽の周波数分布は低周波数ほど大きな強度をもつ「ピラミッド型」の構造をもっている。複数の声部が共鳴し響きを作る歴史は14世紀ポリフォニーの時代より何世紀もかけて培ってきたもので、歌から器楽へ、そして管弦楽へと歴史を築いた。演奏者が教会音楽によって幼い頃から慣れ親しんだポリフォニー感覚と、お互いの音を聴きあう感性から調整し良好な響きを作り出してきた。脈々と続くヨーロッパ音楽の歴史により作り上げられたピラミッド型の周波数分布をもつ音楽は、近代に至って、ジャズ、ロック、ダンスミュージックなどポピュラー音楽にも受け継がれ同種類の周波数分布を示す。それに対して、明治時代に西洋音楽がもたらされるまで日本が培ってきた音楽は大きく違う様相をもつ。むしろ中域から高域にかけて多く周波数分布する邦人作品に見られる和声感の瘦軀さは、日本人がもつ本質的で潜在的なものと言えるかもしれない。人間の聴覚感度は実際の周波数分布とは相違する感覚をもつ。人間の聴覚感度を模したA特性のフィルタを適用した場合の周波数分布、つまり「人間にはこのような感じに聞こえる」という周波数特性は500～700Hzを中心としてほぼ左右対称の中域膨張型となる。この分布を鑑みれば、音楽がバランス良く聞こえる状況は100Hz以下のハーモニーの土台を成す帯域、100Hz～4kHzの音楽における中核を成す主要帯域、4kHz以上が音楽の表情を豊かにする倍音帯域の3層ピラミッドと考えることができる。西洋音楽は、この「3層ピラミッド型」の周波数分布をもち、500～700Hz中心としてほぼ対称形を成す「中域膨張型周波数分布」で聴いているといえる。和声構造に共鳴を求める楽曲を目指し、この周波数分布を理想的状態と考えるならば、作曲者はピラミッド型周波数分布をもつ和声構造をもつよう管弦楽法を駆使する必要がある。また可逆的に発想するならば、音楽の表情を豊かにする倍音帯域を高音域に輝くように広がる管弦楽法が逆三角形のピラミッド構造をもち、4kHz以上が音楽の表情を豊かにする倍音帯域を強調する音楽「汎高域型」の音楽が必要となる。この汎高域型の周波数分布をもつ楽曲は光彩輝く高音域をもつためには低音域を全く必要としない「逆三角形型」と、ピラミッド型構造の低音域の支えをもち、低音域に位置する基音から発せられる倍音域と共鳴する形になる「ピラミッド型と汎高域型の合成型」が考えられる。邦人作品に多く見られる中域に膨張する管弦楽法は音楽の表情を豊かにする倍音成分を含まず、魅力のない管弦楽の響きを作り出すだけでなく、中域に混沌と分布する音楽要素がお互いの倍音構造を相殺し、音圧だけを増す音楽となりかねない。そこで、実際に映画『デーヴ』でのピラミッド型構造を分析してみよう。

ピラミッド型構造の和声

ピラミッド型の管弦楽構造の例として、映画『デーヴ』本編18分48秒からのシーンに位置するキューを一例として分析する。このキューのドラマ的音楽意図は、主人公が車内から見たホワイトハウスを巨大で権威のあるも

のと見せるための音楽であり、巨大さと権威を表現するために管弦楽による音圧および様式美が必要となる。ピラミッド型と汎高域型の合成型により、高音域に音域拡張し、「巨大さ」「権威」の両方を管弦楽がもつ優位性により十分に発揮している。原作品のスケッチにはなく、オーケストレーターの裁量により行われたと推察する部分に、中域以下の低音の充実を想像することができる。チェロ・パートは div. により和音の第5音を使用し、完全5度音程により倍音構造の充実を図っている。映画『デーヴ』のこのシーンでは音楽と映像のシンクロニゼーション（映像にぴったりと合わせて音楽を作ること）が重要であり、夜間、ライトに照らされる美しいホワイトハウスの全景が映った瞬間に、このキューの冒頭和音がアクセントをもって堂々と響き渡る必要がある。あわせシンバル、ティンパニなど打楽器がアクセントをもたらすことは当然であるが、同時に、金管楽器群、木管楽器群の各楽器が立ち上がりの早い音域で吹奏できるよう和声を配置する必要があり、各楽器の特性を生かした管弦楽法が施してある。

木管楽器群のフルート、オーボエ、クラリネットは複旋律として主旋律をハーモナイズし和声感の充実と高音域への輝きを付加するために機能し、汎高域構造を作り出している。譜例1は和声構造を示すために、木管群をコンデンススコアの形で見せている。上から2段目、最上声部に位置するピッコロは旋律の長3度上の和音第3音より開始される。主旋律によりかかるように奏される声部で、この複旋律による共鳴が「巨大さ」「権威」を表現する管弦楽らしい響きをもたらす。この木管コラールは低音域に大きな裾野をもつピラミッド型がもたらす基盤の支えが必須となる。

和音構造は上下に分割し隔離される2群によって構成されている。この2群の間にはオクターブの空間が意図的に設けてある。空間で、譜例1最上段に記した主旋律を1オクターブ下げた位置でトランペットが演奏するため、意図的に空間が設けられている。このことから、デクターは原旋律（ハーモナイズされていない旋律の原型）を譜例1最上段に記した音高ではなく、1オクターブ下の音高、つまりトランペットが演奏する高音部記号第3間ハ音からはじまる音高を基礎と認識していることがわかる。譜例1に最初の和音右に記してある数字およびRは和音の構成音名をあらわしている。2群に分かれている和音構造のそれぞれの群は和音の隣り合った音を配置する密集配分となっている。この配分が強い音圧をもつ理由であると考えられる。

譜例1

2.1.2. 汎高域型構造

前項で説明したピラミッド型とは真逆の周波数分布をもち、低音から高音にむけて音の強度が強くなる逆三角形の構造は、高音域一帯に広がる光彩輝く音色であり、本稿では「汎高域構造」と呼ぶ。ピラミッド型の管弦楽法は、各和音構成音を奏するそれぞれの楽器が共鳴しあい、ひとつの大きな響きを生み出すのに対して、汎高域構造は、高音域に音域をもつ楽器が音楽の表情を豊かにする4kHz以上の倍音帯域特徴に分布し、特徴的で魅力的な光彩輝く音色を作り出し個性的な音楽を作り出す。また弦セクション、木管セクションがもつ繊細な音色効果を金管、打楽器セクションがつぶさないように注意を払われていることがデクターのスコアから読み取れる。

ピアノ、ハーブ、チェレスタ、トライアングルなど、繊細な音色で輝きをもって表現する楽器は「カラーリスト・インストルメント」と呼ばれ、それらの使用は汎高域書法による映画音楽作曲には非常に効果的である。

映画史上において非常に有名な映画『E.T.』の有名な「バイク・チェイス」シーンでのアンダースコアにも汎高域書法を用いた構造を見つけることができる。原著作はジョン・ウィリアムズ⁽¹⁾、オーケストレーションは

ハーバート・スペンサー⁽²⁾によるもので、2 Fl. Picc. 2 Ob. E.hr. Glocken. Triangle Pf. Harp Vln. の高音域で構成された伴奏形に、中音域において Trp. Trb. のユニゾンによる大音量のテーマが登場する。伴奏形をなす楽器群と旋律をなす楽器群の音域差による住み分けが重要で、双方のセクションをつぶさずに主張できるよう配慮されている。譜例2は金管楽器群によるテーマが出現する瞬間の音域差を表している。譜例3段目にある「ハ音」はトランペット、トロンボーンにより堂々と提示される主題の冒頭で、ここもやはり主題が奏される空間があげられている。

Example 2 is a musical score snippet in 2/4 time. It features three staves. The top staff is for Picc. Fl. Ob. Cl. Vlns. and contains a complex rhythmic pattern of eighth and sixteenth notes. The middle staff is for Pf. Harp and contains a few chords. The bottom staff is for Trp. Trb. and contains a simple rhythmic pattern of quarter notes.

譜例2

交響曲により完成された古典派の管弦楽様式はロマン派に入り、高次倍音域に拡張し音色面での拡充を図っていった。時代と共にその拡張は「汎高域構造」をもつ作品を数多く生む。歴史的に有名なレスピーギの交響詩《ローマの松》冒頭では、低音基盤をもたない典型的な汎高域構造をもち、フルート、オーボエ、クラリネット、ヴァイオリン、ヴィオラに加え、弱音器つきトランペット、トライアングル、グロッケン、チェレスタ、ハーブ、ピアノによる高音域への拡充が図られている。オーボエ、ヴァイオリン、ヴィオラのトリルに、弱音器つきトランペットによるロングトーンにトライアングルを加え、高次倍音を華やかに広げる工夫と、フルート、クラリネット、グロッケン、チェレスタ、ハーブ、ピアノによるアルペジオにより和音の共鳴を促進させている。このアルペジオを垂直に並べると譜例3のようにあらわすことができる。主調変ロ長調の主和音の第6音、第9音を含むペンタトニック音階の堆積となっている。

Example 3 is a musical score snippet in 2/4 time, showing a piano part. It consists of three staves. The top staff is in treble clef and shows a series of notes forming a pentatonic scale. The middle and bottom staves are in bass clef and show chords and single notes that support the pentatonic structure.

譜例3

譜例4の映画『デーヴ』冒頭ではデクターの「汎高域構造」を見ることができる。ピアノを最高音域に配置させ、和音の根音および第5音で響きに輝きをもたせている。デクターの最大の特徴は、レスピーギなど近代の管弦楽作品が強奏で華やかに光彩輝く音楽を作り出しているのに対して、静かなダイナミクスで汎高域構造を作り出している点にある。ヴァイオリン群を高音域におかず、ヴァイオリンのA線、D線など乾いた音色で静かにリズムを刻ませ、ピアノ、ハーブなど高音域での動きを支えている。

スペンサー、レスピーギ、デクターの3つの作品を比べてみると、中音域に長い音価を用いて響きを支えている書式は共に共通している。デクターはハ長調の主和音にリディア音階の第4音F#を含ませているため、和音の響きをさらに輝かせている。このF#は和音第3音に解決する非和声音として扱わず、第11高次倍音としての扱いをしているのに対し、レスピーギ作品の冒頭は主調主和音にありながら、変ロを根音にもつ根音、第9音、第3音、第5音、第6音、長7音により構成される長七和音付加六であり、第11音を避けている。デクターの第11音の使用方法はスペンサーの『E.T.』でも同様の扱いを見ることができ、ヨーロッパのクラシック音楽を基礎としているハリウッド作品の進化した特徴を見ることができ、「映画音楽」という新しいジャンルが作り出した音楽様式を見ることができ。

2.2. 構造的特徴

ここまで音響的な特徴について述べてきたが、ここからは管弦楽の書式がもつ特質を生かしたオーケストレーションについて述べる。本学の「実用管弦楽法」講義のメソッドとして「定型書式」と「非定型書式」の学習を研究し、それにより開発したメソッドにより講義を行っている。これらの書式の観点で踏まえ構造的な特徴を考

察する。

2.2.1. 定型書式

ドラムス、ベース、ギター、ピアノの4リズムと呼ばれる基本編成は様々な軽音楽の中核となる。この編成は「リズムセクション」と呼ばれるようにリズム要素を形成する。クラシカルなオーケストラにはリズムセクションがない。しかしながら、マーチやワルツなど舞曲から発展した音楽様式では定型的な伴奏形が管弦楽にも存在しリズムを形成する。例えば大太鼓がチューバ、コントラバスなど和音低音と共に拍点を形成し、小太鼓、トロンボーン、ホルンが和声と共に弱拍を演奏しリズム定型を構成する。これを「定型書式」と呼んでいる。これに対し、和声リズムや対位法的な動きを要素としてリズムを作り出す書式を「非定型書式」と呼んでいる。ロマン派において多く用いられたホモフォニックな音楽では、主題提示部に「定型書式」を用い伴奏形を形成し、主題移行部や展開部では「非定型書式」が用いられるなど、両者が組み合わせられて楽曲が構成されている。ロマン派音楽から大きな影響を受けて発展した映画音楽は、現代においてもロマン派の書式を受け継ぎ、和声的構造をもちつつも現代のリズム要素をあわせもち表現する。映画音楽作品では「定型形」と「非定型形」が必要となる。

映画『デーヴ』でも使用されている登場人物のライトモチーフ（はじめて提示されるのは映画1分05秒からの部分）はハーブが演奏するアルペジオにより伴奏形を形成し定型形書式を構築している。和音が変わることによりリズムを形成する「和声リズム」を利用し、テノール音域では対旋律のような「対位法的アイデア」によってリズムを形成している。「対位法的アイデア」は単にリズム要素をもたらすだけでなく、旋律的な要素が立体的に交差する管弦楽らしい上品な響きを生んでいる。

このキュー原作品の構造を考察し楽曲の骨格を分析すると、最初の2小節間に「ハーモニック・クリシェ」による和声進行が和声リズムをもたらして、さらにアルペジオの伴奏型がリズムを作り出している。自身もピアニストであるジェームズ・ニュートン・ハワードらしいスコアである。この部分のブラッド・デクターの管弦楽用編曲を考察したい。

管弦楽用編曲ではアルペジオ型による伴奏がハーブに割り当てられ、リズムの中心を担っている。ホモフォニックな音楽であり、定型書式により編曲されている。この作品は2台のハーブが使用されている。一般的に映画音楽の編成では、ピアノもハーブ同様、伴奏型を形成してリズムを作り出すことが多く、実用音楽でしばしば用いられる。デクターは汎高域書法のアイデアを用いて、ピアノは高域に広げるための装飾として使用しており、二次的にリズム的な役割をはたしている。日本の交響楽団ではピアニストは常駐していないケースが多く、みかける機会は少ないが、アメリカ近代音楽において、オーケストラの一員としてピアノが編成されることは一般的である（ピアノ協奏曲のようにソリストとしてではなく）。ジョージ・ガーシュインがポール・ホワイトマンからの委嘱により《ラブソディ・イン・ブルー》を作曲した際、ポール・ホワイトマン楽団にはピアニストが常駐していて、同曲の初演時にもピアノ・ソリストとは別にオーケストラの一員としてピアニストが編成されている。

3小節目ではチェロパートにより非和声音（倚音）から和声音への解決（テンション・リゾルブ）による対旋律の動きがリズムを作り出している。和声リズムは低音位位の移動により生じるだけでなく、低音に保続音が使用

The image shows a musical score for Example 4, consisting of five staves. The top staff is for Piano (Pf.), the second for Harp, the third for Violins and Violas (Vlins. Va arco), the fourth for another Harp, and the fifth for Cello and Bass (Cb. pizz.). The music is in 3/4 time and features a rhythmic pattern of eighth notes and quarter notes, with some rests. The piano part has a melodic line, while the harp parts provide a rhythmic accompaniment. The violin/viola part has a rhythmic pattern of eighth notes. The cello/bass part has a simple rhythmic pattern of quarter notes.

譜例 4

されていても、和声進行がもつ仮想低音がリズムを生み出す。デクターの管弦楽用編曲でもコントラバスが演奏する保続低音上にチェロ・パートがクリシエ和音の仮想低音を演奏している。

2.2.2. ユニゾンの構造

「オーケストレーション」という言葉はとても複雑な構造体であるイメージを受けるが、管弦楽の構造は明確で、いくつかの主要要素が、複数の楽器によって重ねられ構造化されるものであり、例えば、25パートの楽器があったとしても25の旋律的要素があるわけではなく、旋律、対旋律、和音、ベースの4種類の基本声部が他の楽器と重複され提示されるにすぎない。この基本声部が明確に整理されていないと、管弦楽全体のイメージが不明瞭になるばかりか、全体の交響乐的響きを損なってしまう。基本声部が多ければ多いほど、混沌とした音楽となり、響きは楽音から雑音へと変化してしまう。いかに基本声部を理路整然と構造化するかが重要であり、ハリウッド作品の魅力である管弦楽の迫力はこのアイデアにより形成されている。そこで管弦楽の構造を視覚的に捉えやすくするために商業音楽で伝統的に使用されてきた「記譜省略記号」を用いて構造を学ぶメソッドを考案した。

その記譜省略記号とは「コーメソプラ come sopras」である。「コーメソプラ」とはイタリア語で「上のよう」に like above」の意味にあたる。コーメソプラはコピーストに「指定した小節」を「指定した小節」へ書き写す指示を記す。コピーしてほしい小節の小節番号を記すことによって指示する。本来、コーメソプラはオーケストラレーターが同じ音符を繰り返して書く作業の短縮を図る目的のものであるが、管弦楽の構造を知るための有効なツールでもある。「c.s.」などと書き記されるが、もっと一般的に「col」が使用される。col は、コーメソプラと同じく、記譜の省略を指示する書き方である。col とはイタリア語で“with”を意味し、指示した楽器とユニゾンで演奏することを指示するために記される。オクターブ上のユニゾンや、移調楽器でのユニゾンの場合は、最初の音を明記することで、オクターブ上がっていることや、移調の必要があることを意味する。日本では「oct up」や「perfect 5th down」などと書き、より明確に指示する習慣がある。この col を利用して管弦楽作品を分析すると楽曲の構造が明確に認識できる。例としてジョルジュ・ビゼー作曲《アルルの女 L'Arlésienne》第1組曲から冒頭部分を記すと譜例5のようになる。全てのパートがviolin Iが演奏する旋律の重複にすぎず、シンプルなオーケストレーションの骨格を見ることができる。ホルンは2組に分かれて、ナチュラルホルンC管とEb管により交互に吹いている。

ユニゾンによる音色は独特な響きをもち、1オクターブの離隔があるユニゾンと2オクターブの離隔があるユ

Allegro deciso. (Tempo di marcia) ♩ = 104

English Horn *col. vln I.*

2 Clarinets in B \flat *col. vln I.*

2 Bassoons *col. vln I.*

Alto Sax *col. vln I.*

I&II
Horns *col. vln I.*

III&IV *col. vln I.*

Allegro deciso. (Tempo di marcia) ♩ = 104

Violin I *col. vln I.*

Violin II *col. vln I.*

Viola *col. vln I.*

Cello *col. vln I.*

Contrabass *col. vln I.*

譜例5

ニゾンとではサウンドは大きく違う。このメソッドではこれらの違いを明確にイメージすることが重要と考える。

2.2.3. フレーミング

アメリカの管弦楽法教育では、管弦楽の骨格を明確にする「フレーミング」とその骨格をシンプルに管弦楽で表現することに重きを置いているように思われる。過去の名作を例にあげ、分析を行いその骨格の明快さを学習する。逆に、より良い交響乐的響きをもつ原作品の作曲には、骨格の明快さを作るフレーミングの技術をメソッドにとりあげるべきであると考えた。そこで、管弦楽曲がピアノ・スケッチによる楽曲骨格からどの楽器が演奏するにかかわらず、シンプルに音を割り当てられていることを理解することに力点を置いている。

和弦を管弦楽で演奏する場合や主題確保部分の冒頭では華やかに盛り上げてフォルテで演奏されることが多い。当然、オーケストラすべての楽器が演奏するように設計されていて複数の声部が入りまじり複雑な様相を示すように思われる。しかし、映画『デーヴ』における主人公のライトモチーフを提示している部分の管弦楽用編曲を come sopra により要素を集約してみると、次の譜例6のようになる。コントラバスによる低音、ホルンによる和音、旋律、ハーブのアルペジオの伴奏に4つに集約される。ハーモニーの部分であっても、声部進行に多様性をもたせないで、シンプルに4つの声部をもたせている。各声部の方向性を一致することが重要で、「チェロの第3音は上行しているのに、ホルンは下行している」とか、「チェロは3拍目に2分音符で止まっているのに、ホルンは4分音符で動いている」などと言う動きは一切なくスッキリとした構造となっている。統一の取れていない同種音の進行は響きを妨げるだけでなく、楽曲の響きを妨げってしまうということが重要であると、今回の分析で感じた。

3. 原作品の交響乐的恣意

交響乐的音響をオーケストラ作品の作曲には、単にオーケストレーションの工夫だけでなく、原作品も交響乐的な骨格をもつ必要がある。次の譜例7は映画『デーヴ』よりM3のキューの和声進行を見せている。このM3は主人公のライトモチーフであり劇中に何度も登場する主題である。映画中、この主題は華やかに盛り上がった形に変奏されることが多い。譜例8は華やかに変奏されたキューの和声進行をあらわしている。この両者を比較してみると、譜例8に示すM3では主音の保続低音上にクリシェ和音を形成する前楽節に引き続き、I - IV - Vと極めてシンプルな和声進行であったが、変奏された譜例9の第5小節ではモーダル・インターチェンジが使用され、主調ハ長調の準VI調から借用されたIとVへ進行している。第4小節にはティンパニのロールによるクレッシェンドと共に、総管弦楽がクレッシェンドして第5小節の和音へ至り強奏する。この部分の充実した響きは管弦楽こそが生み出せる豊かな交響乐的な響きを生み、なおかつ上品な趣をもつ。これはオーケストレーター工夫により図れる響きではなく、原著作者による恣意的な和声進行の設計によってもたらされるものである。響きのよい長3和音を主調から遠隔な調で展開して、響きに強いストレスを与えて楽曲を印象強く聞かせている。

The image shows a musical score for Example 6, featuring various instruments. The score is in 3/4 time and has a key signature of one sharp (F#). The instruments listed are: Flute 1,2; Piccolo; Oboe 1,2; Clarinet in B♭ 1,2; Bassoon 1,2; Horn in F 1,2; Horn in F 3,4; Trumpet in B♭; Trombone 1,2; Bass Trombone; Tuba; Glockenspiel; Harp; Violin I; Viola; Violoncello; Cello; and Contrabass. The score includes dynamic markings such as *col. Vln.*, *col. Vln. Oct down*, *col. Hrn. IV*, *col. Hrn. II*, *col. Hrn. IV*, *col. cb.*, and *pizz.*. A box containing the letter 'F' is located at the top right of the score.

譜例6



譜例 7



譜例 8

交響楽的作品の大きな魅力は充実した和声の響きである。低音位の動きは重要で、完全5度、完全4度上下する低音位の動きを明確にフレーミングできているかが重要である。

管弦楽用作品で書かれるフィギュアの多くは基本的にリズムを作るための素材である。ユニゾンで、ある時はハーモナイズされて使用されるが、主目的はリズムを作り出すことである。推進力と駆動力が主要目的となり、この推進力により生き生きとした映画音楽を形作っている。

4. まとめ

今回のメソッド開発の目標は、管弦楽用編曲技術の向上を意図するものではなく、交響楽的な原作品をどのように作曲するかという作曲技術向上のメソッド開発を目標としている。ここまでの分析で、ピラミッド型と汎高域型それぞれの特徴を生かした楽曲の骨格づくりの必要性と、楽曲構造におけるフレーミングの明快さの必要性を実感した。それに加えて、ピラミッド型の和声配置は管弦楽法によるものではなく、和声進行自体にも交響楽的な響きをもたらすと感じた。また金管楽器の重要性は明白である。日本では予算や編成の都合により、コストのかかる金管セクションを使用する機会は少なく、大編成による音楽制作はゲームやアニメーションなど一部の利益率の高いメディア以外は難しい。しかしながら交響楽的作品には金管楽器の重厚さは必須であり、大編成の金管楽器書式研究の必要性は疑う余地もない。大学でも大編成のオーケストラを組織して実音化するのは難しいため、現実的なMIDIデータ制作におけるシミュレーションにより、実践的な音楽制作と組み合わせる今回の研究を実用音楽研究講義に生かす方法が現実であり、その使用方法が今後の研究課題となるであろう。

参考文献

- ビゼー 《アルルの女》第一組曲 全音楽譜出版 2003年
 ジョン・ピアース著／村上洋一郎訳 『音楽の科学』日経サイエンス社 1991年
 Richard Davis Complete Guide to Film Scoring Berklee Press 1999年
 Fred Karlin/Rayburn Wright “ON THE TRACK” SCHIRMER BOOKS 1990年
 Ottorino Respighi “Pini di Roma” Milan: G. Ricordi & C., 1925年

“Brad Dechter” <https://www.imdb.com/name/nm0213779/> 2021年8月25日閲覧

註

- (1) John Williams アメリカを代表する作曲家、指揮者、ピアニスト。映画『スター・ウォーズ』『ジョーズ』『ジュラシック』

ク・パーク』『ハリー・ポッター』など音楽を担当。

- (2) Herbert Winfield Spencer 1905年4月チリ生まれ。アメリカを代表するオーケストレーター。映画『紳士は金髪が好き』(1953)、『ハロードーリー！』(1969)、『ラ・マンチャの男』(1972)、『スター・ウォーズ』三部作、『E.T.』などの多くの映画音楽のオーケストレーションを担当。